



## グローバリゼーションの時代にあつてこそ自国文化へのアイデンティティを強めよ —ドイツ派遣団の諸君に向けて

麗澤会会長・学長 渡辺利夫

私どもは自分の顔を自分でみることはできません。自分がどんな顔をしているかを知るには、鏡に映してこれを確認するよりほかない。鏡に自分の顔を映し出すことを「投射」(projection)といいます。

自己が他ならぬ自己であることを確認することを「自己同一性」(identity self-identity)といいますが、自己確認のためには他者の存在が必要です。他者の目の中に宿る自己を確認しなければ、私どもは自分のアイデンティティを持つことができない、そういう存在なのです。このことをもう少し広い文脈で考えてみましょう。日本は人種的にも言語的にも「同質的」(homogeneous)です。宗教的には同質とはいえないまでもこれを原因とした宗教集団の対立が国をゆるがすような事態に立ちいたったという歴史をもっておりません。

それゆえ日本人は生まれながらにして同質的な日本人であつて、日本人としてのアイデンティティ確立の努力をすることなく長い歴史を経てきました。古代の白村江の戦い、元寇、秀吉の朝鮮出兵といった「有事」も時にありましたが、これらは「単発的」な有事で日本人に集団的アイデンティティの確立を「強要」する出来事とはならなかったようです。

ようやく日本人としての国民的意識が、つまりは民族的アイデンティティが生まれてきたのは、ユーラシア大陸、とりわけロシアの南下戦略が日本の近代化を脅かし、それを根因として起こった日清・日露の両戦後を通じてでありました。日本の大陸進出は結局のところ第2次世界大戦における敗北という一大悲劇に終わりました。しかし、その後は東西冷戦下の日米同盟という名の米国による庇護の下で安穏な時代を長らく経過し、再び伝統的なアイデンティティ喪失の殻の中にとじこもってしまったのです。しかし東西対立の時代が終焉し、この世界の人々は、人種、言語、宗教といった原初的な人間集団の中に「逃げ込」もうとしており、その過程で起こる悲劇的な対立と摩擦が、地域紛争となつて世界中いたるところで生じるようになりました。

日本人、とくに若い日本人が日本人としてのアイデンティティをもたずに、このグローバリゼーションの時代を生き抜いていくことはまず不可能なことだといわざるをえません。私が本学の学生諸君の海外派遣や留学を決定的に重要だと考える理由がそこにあります。

「ドイツ連邦共和国派遣団」の現地研修実施報告書を私は感銘深く読みました。ドイツの「環境保全」の優れたあり方を見聞するというのが大きな目的でした。しかし同時に、つい10数年まで東西分裂の真只中におかれていたドイツのそこそこに、民族的アイデンティティをもたずしては「生存」そのものが危ういという、そういう過去の際どい現実にも触れてきたのでないかと思ひます。

派遣団が実り多い成果をもって帰国されたことを誇りに思うとともに、日本人のアイデンティティのありようにもこれを機会に深く思いをいたすよう切に希望しております。